

奈良 勲, 高橋哲也, 浅井 仁, 森山英樹 (編)

移動と歩行 生命とリハビリテーションの根源となる ミクロ・マクロ的視座から

橋 元 隆

(九州栄養福祉大学, 教授・理学療法学)



これまで歩行に関する専門書は、数多く出版されている。しかし、それらの多くは歩行分析や異常歩行に関するもので、運動学や動作学的観点で書かれたものである。本書のタイトルは『移動と歩行—生命とリハビリテーションの根源となるミクロ・マクロ的視座から』とされている。

表紙のデザインは筆頭編集者の奈良 勲氏らしい地球に生息する種々の動物をはじめ、人間の移動形態や宇宙天体の移動等が描かれ、まさしく本書の概念を表すべく生命体の存在の根源をミクロ・マクロ的に包含している。

「序章」には奈良哲学ともいえるメッセージが記述され、第1章、第2章はその関係性を保って時空・もの・生命の流れを含む“移動”の概念と理念(倫理)が記述され、第3章は代表的な疾患者の移動形態と移動圏が時系列的に解説されている。

特に、第3章の代表的な疾患者の移動軸として、①病院内、②外来通院、③市町村内、④市町村内～県内、⑤市町村内～国内、⑥海外への移動と6段階に分類され、移動向上への介入、移動圏拡大に向けた症例紹介は斬新である。この分類の中に家庭内移動は含まれていないが、「第2章 環境因子と個人因子に基づく移動圏」で、住居内の移動に利用する福祉

用具、さらには移動環境とバリアフリー整備に関する法制度および安全な移動のための環境整備としてまとめている。

臨床現場でたびたび遭遇する事例として、「私は再度歩けるようになりますか?」との問いかけに対して、「リハビリ頑張りました」と回答することが多々ある。対象者が頑張れば歩けるようになるのか? 対象者の「歩ける」は病前のような実用歩行であるにもかかわらず、担当セラピストは「上手に歩けるようになりましたねえ」と励まし、褒めたとしても対象者は満足するのだろうか?

このような悩みを第1章「医療分野における生命倫理の変遷」で解き明かしてくれている。この項の「はじめに」には、“臨床においては対象者の気持ちと治療者側の意向が合わないことも多い。インフォームド・コンセント(informed consent; IC)という用語は定着してきたが、その本質的な意味が理解されないまま、対象者の考えが医療者側へ届かないことも少なくはない。時代は、対象者の意向を尊重して治療方針を定めてゆく方向に大きく舵を切っており、その背景と考え方を学ぶことが重要となる。その意味で、生命倫理を学ぶことは治療を進めるうえで私たちの道標となってくれるであろう」と記述されている。

また、「おわりに」の項には“医療人が生物学的な狭い範疇にとどまることなく、社会的な視点をもって治療に生かし、学問的にも取り組む時期にきていることを自覚する必要がある”との記述もある。

本書は、2020年(令和2年)から実施される理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則改正に伴うカリキュラムの根幹をなす書の1つであると考えて、教員・学生はもとより、臨床家として新人を指導する中堅や管理職者等に求められる幅広い層に対して「移動と歩行」についてICFの共通言語を基に、IADLからQOL、社会参加への実践書として世界観を触発してくれると確信する。

なお、この書評を依頼されたころ、新型コロナウイルス感染症拡大(ウイルスの移動)のニュースが流れ、小学校から高等学校までの休校、大相撲の無観客開催、選抜高校野球の中止等、過去に経験したことのない社会現象が生じている。移動制限が報じられ、古今東西“移動”は人間の生活基盤をなし、社会参加制約の要因になることを実感するとともに、本書がこの時期に出版されたことに驚きを隠せない。

B5判 344頁 5,000円+税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650